

目次

はじめに	1
凡例	x

天皇・親王

1
陽成

陽成天皇

悪行と洒脱の振幅……………亀田夕佳…9

2
宇多

物語の宇多天皇と宇多天皇の物語り

『源氏物語』と『大和物語』……………山下太郎…19

3 花山

花山院を象る

——物語的創造力から捉える——……………辻 和良 ……29

4 大斎院選子

選子内親王

——大斎院文化サロンの創造力——……………勝亦志織 ……43

5 斎宮女御

斎宮女御

——琴を弾く御息所——……………亀田夕佳 ……53

6 白河

白河院

——善と悪をあわせもつ法皇の文学表象——……………須藤 圭 ……57

7 後鳥羽

軍記物語表現史のなかの後鳥羽院の怨霊

——後鳥羽院と三人の帝たち——……………高木 信…67

賜姓の人びと

8 在原業平・行平

表裏一体の在原兄弟

——行平と業平——……………近藤さやか…81

9 源高明

源高明

——逸話を生む一世源氏——……………村口進介…93

10 源融

源融

——「みやび」を極めた「河原左大臣」——

内藤英子 …… 97

11 平家の人びと

敗れた人びとの物語

——平家の時代を描く——

塩山貴奈 …… 103

藤原の人びと

12 良房・基経

藤原良房と基経

——摂関政治の礎を築いた二人の共演——

村口進介 …… 115

13 道綱母

道綱母

——『蜻蛉日記』以外に見る二つの像——……………櫛井亜依…127

14 中関白家

中関白家

——『枕草子』『栄花物語』『大鏡』、それぞれの伊周像——……………高橋照美…131

15 道長

藤原道長

——「唯一無二」の「権者」——……………浅尾広良…143

16 行成・実資

先に逝く妻、子への思い

——藤原行成と藤原実資の場合——……………土居奈生子…153

17 頼通

藤原頼通と物語……………野村倫子…167

18 定家

藤原定家

——天才歌人の雅俗の逸脱と確執、父俊成しゅんぜいの庇護——……………松浦あゆみ…179

後宮の人びと

19 伊勢

伊勢

——巧緻な歌が紡ぎ出す物語的創造力——……………勝亦志織…193

20 清少納言

清少納言をめぐる物語的創造力

——「誇りかなり」「行末」を軸として——……………東 望 歩 ……199

21 紫式部

紫式部

——二一世紀作品における人物像を中心に——……………星 山 健 ……213

22 赤染衛門・和泉式部

愛の歌仙

——和歌の評価・交流・説話から迫る赤染衛門と和泉式部の魅力——……………池 田 大 輔 ……223

23 菅原孝標女

〈文学時空〉の中の菅原孝標女

——『更級日記』の異端性を中心として——……………中 島 正 二 ……235

臣下の人びと

24 小野篁

小野篁 おののたかむら

——その男、鬼才にして——

井野葉子 …… 247

25 菅原道真

物語的創造力の象る「菅原道真」……

辻和良 …… 261

26 紀貫之

天地鬼神の心を動かす貫之の力

——『土左日記』注釈における神的イメージのバイアス——

東原伸明 …… 275

27 安倍晴明

安倍晴明

——説話の豊穡と物語の冷静——

中島和歌子 …… 283

28 ものけになった人びと

もののけになった人びと

——敗者の恨みとその物語的展開——

小笠原愛子……295

あとがき……

小笠原愛子
辻和良

勝亦志織……309

亀田夕佳
村口進介

執筆者紹介……

……317

付録

① ゆかりの地……

近藤さやか……323

勝亦志織

② 人物・作品一覧……

藤井華子……001
村口進介……⑤

はじめに

編者 辻 和 良

一 史的人物を理解するとは

私たちは、王朝時代の史的人物をどのように理解しているだろうか。例えば、紀貫之はどうだろう。知識としては、『古今和歌集』の選者の一人であるということ、日本文学史上忘れられない人物である。『土左日記』という作品もある。ということから、貫之についてはそれなりに「知っている」と思えてしまう。しかし、それは何を知っていると言うのだろうか。略歴のような知識では、人物の外側をなぞったに等しいのである。

なお、標題で「王朝」と言っているのは、およその目安である。平安初期から院政期を経て、中世の入口辺りまでを緩やかに指しているつもりである。その間に活躍した人物を取り上げて、物語的創造力が象る人物たちの〈姿〉を見ていこうと目論んでいる。⁽¹⁾

『土左日記』は、女性に仮託した作品であるものの、そこには貫之の姿が刻まれてもいるから、貫之を知る好材料であると考える向きもある。だが、『土左日記』の虚構性は、すでに明らかになっている。⁽²⁾その際、『日記』の記述を信頼するから用いる、信頼できないから用いない、このような短絡的な受け取り方では、貫之に関して得るところは、限定的である。

豊かな実りを得ようとする、逆の発想が必要となる。私たちが認識する事柄は、虚構性を抜きにしては成り立た

ない、と見切ることである。右に述べた貫之の情報は、『日記』から受ける心象を核にして紡ぎ出されてくる。このことは、いわゆる日記文学の「作者」とされる人物には、必ず付いてくる。『蜻蛉日記』の道綱母、『和泉式部日記』の和泉式部もそうであり、紫式部においても状況は変わらない。『紫式部日記』がある。

日記は、日記作者の事情だけをたらずわけではない。朋輩たちの情報も気になる人物の情報も『紫式部日記』には、記されている。つまり、もたらされる情報は、幾重にも重なっていることを認識しなくてはならない。

このような情報をどのように理解していくのか。記事を鵜呑みにすることはあり得ないとは言え、その情報がほんとうであるか、そうでないかさえも、じつはまったく問題にならないのである。ここでは、人物の書かれてあるさまざまに現れる〈姿〉を、そのまま濃やかに見ていくことが第一義的に求められている。

右の状況は、日記作者に限ったことではない。いかなる場合であっても、私たちが史的人物について理解しているというのは、じつにこのような過程を経て手に入れた彼らの〈姿〉なのである。それを物語的創造力の生成する意味と言っておこう。

二 王朝作品と史的人物

『源氏物語』にも史上の人物の名前が出ている。例えば、右に挙げた貫之も出てきているし、伊勢もある。平中だつてある。他に源公忠、仁明帝、宇多帝、聖徳太子などもある。このような王朝作品に取り上げられている人物は、どのように位置付けられるのだろうか。虚実の二項対立では片付かない、むしろ、虚実のあわいに位置付けられていると言えよう。

『源氏物語』だけではない。『伊勢物語』、『平中物語』は、それぞれ在原業平、平貞文を核とする物語である。物語の祖とされる『竹取物語』にも実名ではないものの、濃厚に指し示している史的人物がある。